



「喜寿を祝う会」で座談 喜寿を迎えた鈴木金蔵氏 『私が歩んだ 印刷人生』

(1) 大震災に人生を変えられた

史談会開催日

昭和 54 年 6 月 13 日

■語る人

鈴木 金蔵 氏
(有限会社昌美堂印刷所顧問)

■【鈴木金蔵氏の横顔】・

- 明治 35 年に新潟県の新発田で生れる。
- 一時は地震学者を目指したが東京の高等工芸学校印刷工芸科へ入学。昭和 5 年に大日本印刷に入社。平版課係長、同課長、工務課長をへて 29 年、市ヶ谷工場の次長に。6 年ほど次長をやり日進印刷工業建て直しのため、技術担当常務取締役に就任、48 年に「70 歳になったのでここで」と思い、現役を退き同社相談役となり今に至る。それ以外に現在、東京の正進社印刷、宝印刷、東京平版の技術顧問として後進の指導に当たっている。また 48 年には野間賞を受賞。
- 技術顧問でありながら、鈴木氏は「印刷機を自分で動かしたことない」と言う。理論指導が本業のようだ。とはいっても、作業着を着用しての現場指導。また、休みにゴルフなどに出掛け、「ウチでじっとしていることがない」という毎日。77 歳といえども、まだまだ元気な様子。

大日本印刷が佐久間長吉郎社長時代に平版部門の要職にあり、平版技術の向上に努めてきた鈴木金蔵氏が今年の 5 月 16 日で喜寿を迎えた。鈴木氏の半生は昭和 5 年に大日本印刷（当時の秀英舎）に入社以来、印刷以外何も知らない、と自らが認める通り、印刷業界に誠心誠意を尽くしてきたものと言える。そんな鈴木氏の「喜寿を祝う会」が去る 6 月 13 日午後 6 時から、東京・丸の内の日本工業倶楽部で行われた。この会は市村道徳氏が発起人となり印刷同友会（小林直幹事長）が中心となって呼びかけたもの。当日は、従来のような会合形式ではなく、「鈴木氏に大いに語ってもらう」ことを主眼にしたユニークな会が実現。安達秀雄氏（平版印刷）を相手役に約 40 分、鈴木氏が過去そして現在を語り、同友会内外からの参席者一同、杯を傾けながら鈴木氏を囲んで思い出話などひとときを楽しんだ。ここに当日の鈴木氏の話を紹介しよう。

安達 きょうは鈴木さんに本領を發揮していただき、大いに語ってもらいたいと思います。まず、お生れですが……。

鈴木 私は明治 35 年生れで、この 5 月 16 日で満 77 歳になりました。

安達 東京の高等工芸の印刷工芸科をご卒業したのが昭和 2 年。当然、その後は印刷界へと入ることになるわけですが、初めから印刷界を志して工芸科へ入ったのか、あるいは青雲の情があったのが、こうなってしまったのか。その辺のところはいかがですか。

鈴木 今まで印刷以外は何も知らない 50 年でしたが、印刷界へ入る動機はホントにちょっとしたことでした。

当時は田舎から東京へ出てきて、東大の理学部の地震学教室で大

森房吉という博士を師に勉学に勤しんでいました。そして先生の原稿を上梓したり、フィルムを現像したりしていた。順調に行けば今頃は地震学者で相当なところまで行っていたはずなんですかけれども…。

しかし、関東大震災に遇い、東大の地震学教室にあった10数台の地震計がほとんど壊滅し、初期微動だけしか記録されない状態になってしまった。わずか1台のチャチな地震計が記録を残しただけでした。

そんなわけで、当時17歳だった私の地震学者になる夢が、潰えてしまったわけです。大森先生は、その時ちょうど環太平洋会議でハワイに行っていて、急遽戻ってこられたが、横浜に上る時に脳腫瘍でそのまま倒れてしまわれた。世間では「大森先生はなまずに負けた」と言っていましたが……。

そんなこともあって、私は“地震はもうイカン”ということになり、何をやろうかウロウロしていました。その時、今の三秀舎に先生の原稿の上梓や大学の報告書などの印刷を頼んでいて、印刷に多少の興味を持っていた私は、東京・芝浦の高等工芸学校に印刷科があると聞き“そんなところでも、ひとつ受けてみようか”という気持ちで受験しました。そうしたら、試験にパスしてしまったわけです。印刷科に入ったのは大正15年。そして3年過程を終えました。

今思えば、震災に人生を変えられた、というとこでしょうか。

安達 鈴木さんは成績が随分優秀だったと聞きますが、学校の中で唯一人月謝を払わなくとも良く、また三菱の岩崎彥弥さんから何のヒモもなく毎月30円の奨学金をもらっていたそうですね。当時、大学出の初任給が約50円の頃ですから、大変優雅な学生生活を送っていたことになりますね。

学校は何期生でしたか。

鈴木 第3期です。共同の大橋秀雄さんが同期でした。

当時の印刷科卒業生は稀少価値

安達 われわれには、“大日本印刷の鈴木さん”というイメージが強いですが、昭和2年に卒業されてから5年に大日本印刷（当時の秀英舎）に入るまでの3年間は、何をされていたんですか。

鈴木 私は学生時代から秀英舎に現業の練習を行っていました。その時、当時の平版課長に目を付けられ、「お前、卒業したらウチに来るんだゾ」と言われ、私自身もそのつもりでいたんです。ところが、学校を出るころ、クラスメートの中に京都で印刷会社をやっている男がいて、「2年間でいいから、京都のウチの会社にきて、写真製版の工場を建ててくれ」と私に頼む。そこで卒業と同時に学校で習ったノートを持って、ノート通りの工場を建てました。千坪の地所の中にある2百坪ばかりの工場です。カメラなどの製版機械は小西六から入れました。

その工場で2年間、契約通り徒弟を養成し大阪からレタッチャーを呼んで京都で初めての写真製版の工場を軌道に乗せました。帝国印刷という会社ですが……。

東京に帰ると、大日本の平版課長が待ち構えていたんですが、私自身は半年ほど大学の研究室におりました。そして昭和5年に入社へ、となったわけです。

安達 平判の課長さんがズーッと待っていたというお話ですが、昭和2年から5年の間というと、ちょうど第一次大戦で、金融恐慌があったり、不景気のどん底でしたね。就職先などは、なくなったりしなかったんですか。「大学は出たけれど……」になりかねない感じですが。

鈴木 いえ、印刷は卒業生がたった20名で稀少価値だったんですね。私でも5カ所ぐらいから、口がかかっていましたよ。ですから就職の心配などは全くなかったですね。

安達 全般的に悪い時代でも、鈴木さんに限っては、学生時代も優雅で、就職も楽だったんですね。

話は変わりますが、鈴木さんは初めから平版分野をやっていらしたんですか。

鈴木 ええ、私は最初から平版でしたね。入社してすぐ、暗室にこもって7年間、オフセットのタネどりをやっていました。当時は大日本印刷にカメラの従業員が10何名かいましたが、出版のタネどりでは誰にも負けないつもりでいました。自分で言うのもなんですが、見事なものでしたよ。

そのころレタッチャーは20名くらいいましたが、終いには出版社からのお声がかりになって、「これはひとつ、鈴木にとってもらってくれ」と、アッチからもコッチからも出て困ったことがありました。

大日本印刷の佐久間社長なども現場にこられて、ジッと見ていたこともありますよ。

安達 鈴木さんは学者っぽく見えますが、現場のほうもたいしたものなんですね。それはお見それしました。

今はそんなことはないですが、当時は学卒の人と、現場でキャリアを積み重ねた人との関係には難しいものがありましたね。その辺で摩擦のようなものはなかったですか。

鈴木 いえ、入社するときに、その点は釘をさされました。「お前は学校を出てきた。しかし、学校出を鼻にかけて職場に入ったら、ヤラれる」と。現にハンマーを持って追いかけられた同級生もいたんですよ。

私はそういうところは、良く心地いて、ヤラれるようなことはなかったですね。その変わり、時の来るのを待ってジッとしていました。

何しろ、サンバットなんかは指を突っ込むんですよ。今で言えば、リトマス試験紙があるものを、とこっちはウズウズしている。しかし、それを言ったらマズイと思い、黙っていました。

ある時、ふっとリトマス試験紙を出して使っていると、「何だ、ソレは」と言う。私が「酸の濃度を測っているんだ」と言うと、「面白いじゃないか、これからソレを使おう」ということになった、と言うようなエピソードもあります。

(2) 空襲中、佐久間社長と工場の夜警

安達 鈴木さんは戦前、戦中、戦後と25年もの間、大日本印刷にいらして、何か苦労はありましたか。戦後は管理の立場で、労働問題その他、大変難しい時期だったと思いますが。

鈴木 それはもう、たくさんあって話しきれないくらいです。

大東亜戦争で仲間はみんな疎開しまして、大日本印刷にも新潟県の新発田に疎開工場が出来ました。そこは私の故郷だったので、「これは私が行くことになるナ、銀シャリでも食べて、ゆっくりしてこう」などと思っていると、違う課長がクジを引いて行くことになってしまった。その頃の技師長で「なんで私を行かせてくれないんだ」と、怒鳴り込んだ人もいましたよ。

私は空襲の最中にずっと東京にいました。工場に泊まり込んで、毛布を敷いて寝ているんですが、空襲がくると、金剛杖を持って工場の中を回るんです。佐久間社長も夜、回ってこられたりしました。そんな苦労もありましたね。

そのころは機械も疎開していて、東京の工場では何分の一かになっていましたが、その機械のほとんどは、地図やデータなどをするために軍に提供していました。それで、軍からも工場に人が来ていて、その世話や何かで私はほとんど家に帰れませんでした。毎日、平版課の中で毛布を敷いてゲートルを巻いて寝ていて、佐久間社長と工場の中を回って歩いてました。食べ物も豆の入った玄米で作った三角の握り飯、しかも量は少なかったですね。

安達 当時の佐久間社長の想い出などは、いかがですか。

鈴木 ある時、私の友人で、佐久間社長に会って話を聞きたいという者がいたので、名刺に紹介文を書いて、社長に紹介してあげたことがあります。その名刺に書いた文面は、「優…………氏、……で、お目にかかりたいとのこと。ひとつ会ってやってください」というものでした。そしてその友人は社長に会って、いろいろな話をお聞きして帰ったわけです。

後日、私が社長のところに行くと、社長は「自分の友達を先輩に紹介する時に、『優』ということはあるかい」と言われました。何故

か、そのことをよく憶えていますね。

安達 「印刷同友会」との接触は、どういう動機だったんですか。

鈴木 当時のこととはよく憶えていないんですが、神田の今川橋あたりに青年を奮い立たせるような運動をしている人がいると聞いたことがあります。私は、ちょうど平版の課長になったばかりで、若い人を指導して行く立場に立っていました。そこで何か「秘法」でもあったら伝授してもらいたいと思って、そこに行ったんですよ。

そうすると、市村道徳さんの人柄が私の求めているものにピッタリでした。そこで早速市村さんの信者になりました。それが始まりです。特に市村さんと知り合いだったということではありません。

市村さんと出会ったのは、私が暗中模索の状態だったときです。それ以来「同友会」の信者になりましたね。

安達 鈴木さんにとっての同友会とは、どんなものですか。一言で言いますと……。

鈴木 「同友会」に入って37年目になりますが、終始一貫して、同友会によって、私は清められ高められてきました。困ることがあれば、皆さんの友情に救われました。今日、私があるのは皆さんの厚情のお蔭という気持ちで、同友会は「命」みたいなものです。許されれば、一生仲間にしていただき、最後まで共に歩みたいと思っています。

安達 最近、緑友会のメンバーでも定年制を敷いているといったように定年制グループが多いのですが、同友会は定年制はありません。是非、いつまでも後進の指導に当ってください。

「印刷一家」ということですが、ご家族の話を少々お願ひします。

鈴木 子供は男が3人、女が2人。長男は36歳。千葉大学の大学院を卒業し、東洋インキ製造の研究所に入り、ペティ事業部を行ったあと、ドイツに留学しました。方向転換して、医学の道に進み、ドイツのルーベックという医大に入り、苦労して医者の資格をとりました。今年帰ってきて今、日本の医者の資格を取るため、国家試験の勉強をしています。次男は本州製紙の資材課長代理。三男はトッパンムーアの課長代理です。

娘は上が嫁に行き、下は印刷学会に入っています。

安達 趣味ですが……。

鈴木 ビリについて回っているゴルフ。月に2回はコースに出ます。業界の50歳以上の人を入れる「五鈴会」にも入っています。小唄も3年ぐらい。家内が三味線をやっているもので。

